

「初めまして」

—初稿—

2024/6/6

月三

へ人物表へ

山崎凜那（18） 大学1年生

山崎りつ子（82） 凜那の祖母

高岡星生（しょう）（18） 大学1年生

高岡正三（85） 星生の祖父

へログラインへ

アプリで出会った凜那と星生は、初めて二人で遊びに行くことになるが、本当にアプリをしていたのは彼らの祖母だった。

へねらいへ

今だからこそ起こりそうな小さな出来事でクスリと笑える展開にしたい。

1、電車・内

スマホを触っている山崎凜那（18）。
つまらなそうな顔。

2、スマホ画面

チャットアプリに打たれるメッセージ。（以下、
括弧のみはスマホアプリ内のメッセージ文）
「やっと星生（しょう）さんにお会いできるな
んて、私とても嬉しいです」

3、別のスマホ画面

アプリに続きの返事が打たれる。
「こちらも身に余る光栄です。本日、凜那さん
とお会いできますことを、とても楽しみにしており
ます」

4、別電車・内

スマホを触っている高岡星生（18）。
ため息をつく。

5、山崎りつ子の家・外観

田舎にポツリと立つ一軒家。

6、山崎りつ子の家・リビング

スマホを触っている山崎りつ子（82）。
凜那にチャット。
「ちゃんと眠れたかしら？」

7、電車内

凜那、アプリでりつ子に返事。
「あまり寝れてない。てかさ、おばあちゃん。
私本当はこういうアプリ嫌いであ

8、山崎りつ子の家・リビング

りつ子、戸惑いの顔。

9、高岡正三の家・外観

10、高岡正三の家・リビング

高岡正三（85）がスマホを触っている。
チャットアプリの画面。

「星生、お前なら大丈夫だ」

11、電車内

星生、頭かきつつ正三にチャットで返事。
「へいへーい」

12、駅・電車の停車場

電車を降りる凜那。
× × ×

別の電車から降りる星生。

13、駅・構内

スマホを片手に歩く凜那。
と、電話が鳴る。

凜那 「もしもし?」

14、山崎りつ子の家・リビング

スマホを耳に当てているりつ子。
りつ子「あ、凜那ちゃん、駅に着いた?」

(以下カットバック)
× × ×

凜那 「ちょうど今着いた」
× × ×

りつ子「凜那ちゃん、あのね……」

15、駅

立ち止まる凜那。

凜那 「えー！ 会わないでほしいってどういうこと!？」

16、山崎りつ子の家・りつ子の部屋

りつ子、部屋を歩きながら、

りつ子 「凜那ちゃんには本当に申し訳ないと思ってるのよ。凜那ちゃんの写真で、星生さんとお話してたこと」

凜那 「うん」

りつ子 「でもね、やっぱりだめね。私がいに行って、きちんと謝るわ」

凜那 「おばあちゃん」

りつ子 「本当にごめんなさいね。凜那ちゃん」

凜那 「わかった。とりあえず今日は会って、私が謝ってくるよ」

りつ子 「今から私もいくわ」

凜那 「大丈夫、でも電話は繋いでおくから、何かあったら助けてね、おばあちゃん」

りつ子 「もちろんよ」

17、駅

凜那は苦笑い。

凜那 「全く、しょうがないなあ」

凜那は待ち合わせ場所に歩いてく。

18、駅・待ち合わせ場所

電話をしている星生。

星生 「まだきてねーよ」

正三 「しゃんとせんか!」

星生 「しゃんとて」

星生、つまらなそうに電話をしている。

正三 「赤い帽子に、ジーンズ」

星生 「はい？」

正三 「赤い帽子にジーンズできとるって」

星生 「へいへい、赤い帽子に」

凜那は赤い帽子にジーンズ姿でキョロキョロ。

星生 「ジーンズ？ え？ あの子？ めっちゃかわいいんだけどー！」

正三 「いってこい！ 男を見せる星生」

星生 「おっす！」

星生、凜那の方に歩いていく。

凜那の後ろからそろりと肩を叩く星生。

振り返る凜那。

凜那、目を見開く。

凜那の心の声「やば、イケメン」

星生 「あの、凜那さんですか？」

凜那 「はい、え！ 星生さんですか？」

星生 「はい、はじめまして」

凜那 「あ、ちょっと待っててもらっていいですか？」

星生 「はい？」

凜那、ポケットからスマホを出す。

凜那 「おばあちゃんお待たせ！ 星生さん全然平気だった！」
りつ子 「え！ どうしたの、凜那ちゃん」

星生のスマホから、正三の大声が響く。

正三 「どうだ星生？ 凜那さんに会えたか？」

星生 「やべ！ 携帯切れてなかった」

凜那 「え？ わたし？」

星生 「そうなんです、今日会うことじいちゃんにあって」

正三の声「俺の凜奈さんはどうだ？」

星生 「あのばかじい！」

星生、スマホに耳をつけて、

星生 「じいちゃん、まる聞こえだったの。俺の凜那さんとか何
いっちゃってんの」

正三 「俺が連絡してたんだから、俺の凜那さんだろうが！」

凜那 「え？」

凜那、手が止まり、

凜那 「星生さん？」

凜那、星生を指差す。

星生 「はい」

凜那、スマホを指差す。

凜那 「そちらも星生さん？」

星生、あちゃーという顔で、

星生 「もうごめんなさい！ 凜那さんと連絡をとっていたのは、
じいちゃんの正三です」

星生、スマホを指差す。

星生 「じいちゃん、年ごまかして俺の写真でアプリやってたら
しくて。ほんとすんません！」

凜那 「いやいや、こちらもです」

凜那、スマホを指差さす。

凜那 「私のおばあちゃんも私の写真で連絡をとってたんです」

凜那、スマホをスピーカーにする。

りつ子 「星生さんにはお会いできた？ 凜那ちゃん？」

凜那と星生は目を合わせて、大爆笑する。

凜那 「おばあちゃん、星生さんと話したい？ いいですか？」

凜那は星生のスマホを指差す。

星生はこくりとうなずき、

星生 「じいちゃん、直接話して」

正三 「凜那さんが、かけろっていつてるのか？」

星生 「そうそう。あと凜那じゃなくてりつ子さんね」

電話を切る星生。

星生、凜那をみる。

星生 「本当の星生です」

凜那 「私が凜那でした」

笑い合う二人。

星生 「せっかくだし、遊んできますか？」

凜那 「ですね」

歩いていく二人の背中。

19、高岡正三の家・リビング

困惑する正三。

正三 「なんで星生と会ってるのに、電話するんだ？」

正三、星生から送られてきた番号に電話する。

20、山崎りつ子の家・りつ子の部屋

りつ子のスマホがなる。

りつ子「はい……」

正三「凜那さん？ りつ子？ さん」

りつ子「え？ 星生さん？」

正三「いや……私、本当は正三というんです。実は、孫の写真使ってアプリしました」

りつ子「実は私もなんです。りつ子といいます」

二人はどちらからともなく笑い出す。

正三「じゃあ、もう一度初めまして、ですかね」

りつ子「そうですね、はじめまして正三さん」

正三「はじめまして、りつ子さん」

完